

「良い羊飼い」

ヨハネによる福音書 10:1-18

今日から「待降節」(アドベント)に入ります。「アドベント」と言うのは「来る」という意味のラテン語で、「イエス・キリストが来られる」ことを意味します。代々の教会は、クリスマスまでの4週間の期間を「アドベント」と呼んで、イエス・キリストの降誕を祝う心の準備をしたのです。アドベント・クランツに4本のロウソクを立て、日曜ごとにそのローソクに1本ずつ火を灯し、4本のロウソク全部に火が灯された時、御子の降誕を共に喜び祝ったのです。このような習慣の中にも、このクリスマスがどんなに大切な行事であり、みんなが待ち焦がれた時であったか、ということが分かります。それは、クリスマスを行事として喜び楽しむためではなく、救い主イエス・キリストがこの世に来られたことを喜び祝うとともに、その主・キリストが再びこの世に来られることを待ち望むという意味をも含んでいたのです。

救い主の到来ということは、イスラエルの民が古くから待ち望んでいたことでした。度重なる戦乱と大国による圧制や捕囚等の苦しみの中で、イスラエルの民は、主なる神による救いと解放を祈り続けてまいりました。先ほどご一緒に賛美した讃美歌120番は、詩編23篇の「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせて下さる」という、み言葉を歌ったものですが、この詩編23篇も、この世の王や支配者に失望し、信頼できなくなった民が、「主こそわが羊飼い」と神を讃え、神による平和を祈り求めたものです。イザヤ、エレミヤ、エゼキエルなど、旧約の預言者たちも口をそろえて、主こそイスラエルの「牧者」と語り、「神自らが、羊飼いとなって、この世に来られ、散らされた群れを集め、養ってくださる」(例エゼキエル 34:11)と期待し、「神は、み心にかなう牧者を与えてくださる」(エレミヤ 3:15)と預言しました。

今日の聖書の箇所は、旧約聖書のそのような約束と預言を背景として、イエスさまが「わたしは良い羊飼いである」(10:11,14)と語られた箇所です。「わたしは良い羊飼いである」。この言葉は、原文で見ると、「わたし」という言葉に強調点が置かれていて、「わたしこそ、まことの羊飼いである」という意味の言葉です。イエスさまこそが、神さまから遣わされた「良き羊飼い」だ、というのです。

「羊飼い」と言っても、羊を飼う習慣のない私たち日本人にとって、あまりピンと来ないかも知れませんが、パレスチナ地方では、実に身近な存在でした。10数年前、私はイスラエルを旅した時、ベドウィンと呼ばれる人々が、多くの羊の群れを引き連れて、高原を歩いている姿に出会ったことがあります。ツアーのバスで移動していた時、

丁度、バスの前を羊飼いに連れられた多くの羊の群れが横切り、しばらく通り過ぎるのを待たなければなりませんでした。それはとてもラッキーな体験で、イエスさまの時代に逆戻りしたような思いを味わうことができました。

今日のこの 10 章 3-4 節に、「羊飼いは、自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、その先頭に立って行く。羊もその声を知っているの、ついて行く」とあります。羊飼いは、どんなに羊の数が多くても、一匹一匹の羊に名前を付けて、その名を呼んで、囲いから外に連れ出すのです。羊飼いは、自分の羊のことをよく知り、羊たちも羊飼いのことをよく知っていて、その声に聴き従うのです。ここで使われている「知る」という言葉は、単なる知識として「知っている」という意味ではなく、深く内的に信頼し、愛し合っている人格的な関係を意味する言葉です。羊飼いが一匹一匹の羊をわが子のように愛するその愛に応えて、羊も、羊飼いを慕い信頼し、どこまでもついて行くのです。盗人や強盗などの声には、決して従わないというのです。

イエスさまは、マタイ福音書の 18 章などで、「100 匹の羊を持っていた羊飼い」の譬えを語っています。その 100 匹の羊の中の「1 匹が迷い出たとすれば、99 匹の羊を山に残しておいて、迷い出た 1 匹を捜しにいかないだろうか」と述べ、「もしそれを見つけたら、迷わずにいた 99 匹より、その 1 匹のことを喜ぶだろう」と言われました(18:12-14)。この譬えは、羊飼いの羊に対する愛と配慮は、群れ全体に対するものであるけれども、羊を「群れ」として扱わず、その 1 匹 1 匹を配慮し、その 1 匹が居なくなっても、すぐに気付き、99 匹を残してでも、危険を冒して探し出し、救い出すというのです。これは、「良い羊飼い」として来られた主が、いかに「いと小さき者」の一人一人にまで心を配り、細やかな配慮をされる方であることを示しているのです。

ある人の言葉に「イエス・キリストは、迷える羊を訪ね求めて、神であることから人となるまでの永遠の道のりを歩いて来られた羊飼いである」というのがあります。まさにイエス・キリストは、そのような「良き羊飼い」として、この世に来てくださった救い主なのです。

イエスさまが「わたしは良い羊飼い」と言われる時、暗黙の裡に意図されていることは、「私たちは、イエスさまの羊である」ということです。「羊」は、方向感覚が鈍く大変迷いやすい動物です。しかも、もっとも弱い動物の代表といってもよいような、頼りない存在です。彼らには他の動物と闘うような鋭い牙も角もなく、相手を傷つけるような鋭い爪も力ありません。また逃げるための早い足もありません。オオカミのような獣に襲われたらひとたまりもなく餌食にされてしまうような、か弱い存在です。だから群れをなさなければ生きていけないのですが、群れだけでもどうしようもない、羊飼いに見守られ、導かれなければ存在することのできない家畜なのです。

私たち人間が、このような「羊」に譬えられているということは、人によっては、馬鹿にされたような、不快感を抱く人もいるかも知れません。「自分は羊なんかではない。羊のように迷うことはないし、独りでいることにも耐えられる。自分の身は自分で守れる。オオカミほど強くなくても、自立した野犬ぐらいの強さならある」という人もいるかも知れません。けれども、ほんとうにそうだろうか？ 私もかつては「強い人間」にあこがれ、神仏に頼らず、どんな誘惑にも負けず、自分の力で自分を律して、毅然とした生き方をしたいと心がけてきました。しかし、現実には自分の弱さに勝てず、さまざまな誘惑に負け、自分に絶望するしかありませんでした。そういう、自分の弱さの中から、救いを求めたのですが、イエスさまは、あるがままの自分を受け入れ、赦し愛して下さいました。そのことによって、私は自分の弱さを担い、共に働いてくださる主によって、生きる望みと力を与えられ、詩編の記者が詠っているように、「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。…魂を生き返らせて下さる」(23:1)ということを実感することが出来るようになりました。羊飼いであるイエスさまが、迷える羊のような私を捕らえて、教会という群れの中で、豊に養い育ててくださったのです。

「わたしは良い羊飼いである」と言われたイエスさまは、11節で「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言われました。イエスさまは、この所で5回もこの「命を捨てる」ということを語っておられます。この「捨てる」言葉は、いらなくなったから投げ捨てるという意味ではありません。羊を守るために、犠牲として捧げるという、意味です。羊飼いではなく、雇人の場合、「オオカミが来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げ」(12節)自分の身を守り、羊を犠牲にするのです。しかし、「良い羊飼い」は羊のために身を挺して闘い、羊のために犠牲になるのです。これが、イエスさまの十字架です。イエスさまは、私たちを罪から贖うために、つまり、十字架で死ぬために、この世に来られたのです。

「わたしは羊のために命を捨てる」。イエスさまはこのように繰り返して語られた後、16節で「わたしには、この囲いに入っていない他の羊もいる。その羊をも導かなければならない」と言われました。イエスさまの愛は、すでに選ばれている群れだけにとどまるものではありません。まだ救われていない他の多くの人々をも招き、「一人の羊飼いに導かれる一つの群れになる」ことがわたしの願いだ、と言われるのです。イエスさまは、教会という囲いの中に居る人たちのためだけに、十字架に付かれたわけではありません。世にあるすべての人の罪を負い、みんなが一つの群れとなるために、ご自分の命を犠牲にされたのです。

教会は、すでに救われた者たちが、自分たちだけの内輪の交わりに満足する「自己目的」のための集まりではないのです。「囲いの外」にいる多くの人たちが、いつか共に

加わり、共に羊飼いであられる主の導きのもとに、共に「青草の原、憩いの水際」(詩編 23:2)にくつろぐ、そのことを祈りつつ、努める群れなのです。今は小さき群れですが、いつかはそのような「神の国」が来ることを祈りつつ、そのために労することが求められているのです。

十字架に掛かれた主は、復活の後、弟子たちに現れ、「すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」(マタイ 28:19-20)と命じられました。また、このヨハネ福音書の最後 21 章には、イエスさまのことを 3 度も「知らない」と否んだシモン・ペトロに、復活の主イエスは「わたしを愛するか」と 3 度問い、そのつど心を痛めながら「あなたを愛していることは、あなたをご存知です」と答えたペトロに、主は 3 度にわたって「わたしの羊を飼いなさい」「わたしの羊の世話をしなさい」と命じられました。「良い羊飼い」である主は、ご自分の羊を養い、その世話をする務めをその弟子たちに託し、さらに囲いの外にいる多くの人たちを、主のみ許に導く伝道の使命を託されたのです。教会はそのために「牧師」を招聘し、その務めを共に担うのです。

主の羊の群れを守り養い導くのは、たしかに「牧師」の務めです。しかしそれは、牧師一人だけの務めではありません。群れに連なる教会員みんなの務めであり責任でもあります。今日はこの後、牧師招聘を議題とした大事な教会総会がもたれますが、どのような牧師をお招きするにしても、教会員みんなの祈りと協力がなければ、その尊い務めは誰にも全うできないことです。どうかそのような思いをもって、教会総会に臨んで頂きたいと願います。そして、やがて迎えるクリスマス、来たり給う主イエスキリストを、共に喜びと感謝をもって、心の深みにお迎えしたいと願います。

アーメン